

北里柴三郎「北里柴三郎書簡」明治44（1911）年4月4日

三月廿七日御投与之書簡参り拝掌、弥御多祥奉賀候。

先般帰京之節、拜趨可仕筈之処又々直ニ出張仕る様に相成候。

乍不本意欠礼仕候段不^{ふほんいながら}悪^{あしからず}御諒承被下候様奉願上候。扱^{さて}今回の

万国ペスト研究会は名の如く純然たる学会とせざれば防疫上の

措置にまで無関係なる各国より彼れ是れと口を出されては、只た清国のみならず

延^ひいては日露の不利益を来すの虞^{おそれ}御座候に付、其辺は清国の当局者へ

注意致し置き候処、清国側にては雇ひ入れの英医者と相談して既に

大体の設備を為したる後にて大分まごつき居候。一例を挙げれば学会の

プログラムの如きも北京英国公使館附の英医グレーなるものに依

頼してペスト病学の教科書より全然書き取りたる如きものを臆面も

なく提出したるなど、各国委員の心あるものは苦笑致し居候。因而^{よって}昨日

委員会に於て特別委員を設け先づプログラムの改正をなし

明日より会議を始むる筈ニ御座候。然而^{しかりて}は其外に各国委員中より

三名の幹事を撰し、日々の会議の順序等を前日に定めしむる等、

凡^{すべ}て主客転倒の有様に候得共、是亦^{やむをえず}不得已次第に御座候。右三名の

幹事は日本（柴山）、英国、露国より各一名を出し候。如此^{かくのいひ}にして

漸く順序に就き可申候。昨日は開会式を挙げられ摂政王の祝辞、

満州総督之開会の辞、各国委員総代として露国委員（是れは元と

この
比会議は露国之提議に基くに由り露国委員が答辞を述べしとの各

国委員の決議に由り）の答辞等例に由りて例の如き次第に御座候。

然し当奉天に如比万国会を開き兎^{とにかく}二角曲りなりにも其事務を

進捗せしめて開会にまでこぎ付けたるは清国としては大出来に候。

比点よりすれば万国医学会を日本に開くは尚ほ早しとして欧米の学者をむやみに恐れらるる赤門辺の先生少々顔色なきの至に御座候。昨日の委員会に於て最も議論ありしは会議の用語に候。

原案には英語、支那語に限りると有之候ヲを各国委員銘々に
自国語を入れんと主張致し候而、一時間余激論の後ち漸く一
般の万国会議に通語として用ひらるる英仏独語となし今回は

清国にての会議に付特に支那語を加ふることに相成り候。尤も英

国清国の委員等は原案を固持して動かざること数時、終に小生の
耐忍袋破裂し一発を食はせ候次第に御座候。然るに帰館して

先生の芳翰ほうかんに接し、耐忍せよと特に御注意を賜はり、少々愧はチ入申候。

今後は御注意を守り可成耐忍袋の緒をしめ置き可申候間、

御安神被下度候。本日は休会、明日より本会議に取り掛り

可申候。会期は未定に候。若し清国より提出のプログラム通りに

議したらんには六七十日の日子を要し可申候。如何いかにのん氣の各

国委員も是には少々閉口ノ体に御座候。呵々

右拝答はいとう旁かたがた申上候。 敬具

四月四日 北里柴三郎

石黒男爵閣下